

ヨハネ福音書 21章「私を愛しますか？」 - 2024.02.01

三度の問いかけの一般的理解

ヨハネの福音書21章で、復活したイエスがガリラヤ湖畔の炭火のそばでペテロに「私を愛しますか」と三度問いかける場面は、十字架につけられる前に大祭司の庭の火のそばでペテロが三度イエスを否定したことを思い起こさせる。このため、イエスがペテロの三度の失敗をもう一度やり直させ、赦しを与えるためにわざわざ三回聞いているという解釈がよく聞かれる。

確かにその関連性はある。ルカの福音書22章を見ると、ペテロの否定の背後にサタンの働き、サタンの誘惑があったことが分かる。ペテロの手紙第一の終わりの方で「サタンに立ち向かいなさい」と語るのも、一切の信仰の戦いを戦うという文脈であり、この箇所を連想させる。

アガペーとフィレオの使い分けについての疑問

「私を愛しますか」という問いに対し「私が愛することをご存知です」と答えるペテロの言葉は、へりくだった言い方だと言われることがある。またイエスが使う言葉が「アガペー(神的な愛)」から「フィレオ(友愛)」に変わり、ペテロのレベルに合わせてフィレオという言い方を使ってあげた、といった解釈もなされる。

しかし、彼らはギリシャ語で会話していない。元々ヘブル語かアラム語のどちらかで話しているのだから、ギリシャ語の単語の使い分けだけで神学的意味を見出すのには疑問が残る。

「ヨハネの子シモン」という呼びかけの意味

イエスが「ヨハネの子シモン」という言い方でペテロを呼びかけることには意味がある。この呼び方をするのは、ヨハネの福音書1章42節で弟子として召す時である。召命のところでペテロを「ヨハネの子シモン」と呼んでいるのだから、この21章の場面はもう一度弟子にする、つまり再召命の段落だと考えられる。

ペテロは代表者として答えている

「三度裏切ります」とイエスが預言した時、実は弟子たちはみな同じことを言っている。「そんな、知らないなんて言いません」というのはペテロだけが言ったわけではない。ペテロが特別に取り上げられているが、「全部の者がつまずいても私は決してつまずきません」、あるいは「一緒に死ななければならないとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません」と、弟子たちは皆そう言ったと福音書に記されている。

このように、これはペテロの個人的な罪というより、弟子たちみんながそう言っているものである。したがってペテロが代表してこの答えをしているとも言える。

「愛しますか」への戸惑いの応答

「愛しますか」と聞かれて「はい、そうです」と答える場面だが、これは「自分では愛するなんてとても言えません」という謙遜の表現ではなく、「愛していることを知っているのになぜそんなことを聞くのですか」という戸惑いの答えとして見るべきである。

「私が愛することを知っていますよね？ なぜそれを聞くのですか？」ということに二回答え、そして三回目も聞かれたから、困って悲しくなって「なぜそんなことを聞くのですか」と言っている方が、会話の流れとしては自然である。

私たちは「三回愛しますかと言われる」ということを知って読んでいるので、最初からペテロが三回言われると分かって答えているかのような解釈になってしまいがちだが、彼は分かっていない。いきなり「愛しますか」と言われて、さっき水に飛び込んで一番先にイエスのもとへ行っただけではないか、ということである。相変わらず一番最初に行ってその愛を見せているのに、「私が愛していないとは何をおっしゃっているのでしょうか」ということなのである。

もちろん、三回言われた時に、三回否定したことを思い出して悲しんだということはあるかもしれない。しかし三回何かをしたというのは他にも色々ある。マタイの福音書26章で「みんな知らないなどとは決して申しません」と言ってからゲツセマネに行って祈るが、祈っている間にみんな寝てしまう。弟子みんなが寝てしまっただけで、三回目に祈ったのだけれど、弟子はまた寝ている。ここも三回なので、悔い改めるべきなのは否定したことだけでなく他にもある。

「愛する」と「信じる」の関係

「私を愛しますか」と聞いた時、私たちの今の時代の「愛」という言葉の感覚が少し強すぎる、個人的な愛のことを思い出してしまう傾向があるかもしれない。

ヨハネの福音書16章27節、これは最後の晩餐の教えの最後、父に祈る前の箇所だが、「それはあなたがたが私を愛し、また私を神から出てきた者と信じたので、父ご自身があなたがたを愛しておられる」と言っている。「私が神から出てきたと信じた」、「私たちはあなたが神から来られたことを信じます」と二回言っている。

「私を愛している(キリストを愛している)」というのは、別の言い方をすると「キリストは神から出てきた者だと信じた」、「主はキリストである」という告白と言い換えることもできる。

したがって、「私を信じますか？ 私がメシアだということを信じますか？」という意味で言うと、「いや、メシアだと信じていることは知っているはずですよ」というような答えになる。イエスはその信仰がなくならないようにも祈ってくれた。

そうは言っても散らされてしまう時が来る。「家に帰って私を一人残す時が来ます(すでに来ています)。でも世にあって患難がありますが、勇敢に戦ってください。私はすでに世に勝ちました」という言葉に続く。「弟子たちの信仰がなくならないように祈ります」と言っている祈りは、まさにヨハネの17章の祈りである。

弟子全体の再召命としての21章

そして、ペテロを牧者として選ぶ場面である。元々、大漁の出来事がルカの福音書5章にあって、みんなその後すべてを捨ててついて行く。「人間をとる漁師にする」と言われているのは、弟子たち全体に対する言い方だった。

弟子たちをもう一度集めて、ペテロを代表にして「私に従いますか、ついて来ますか」と聞いて、ついて来るなら死にます、ということを書いて、もう一度弟子にする。それがこの「愛しますか、愛することを知っている」という箇所の意味である。

ヨハネ21章は、個人的な罪の悔い改めというよりも、弟子たちの信仰の確認と、復活後の新しい使命への再召命の場面として理解すべきなのである。